芥川賞、直木賞を創った男

菊池寛（きくち かん）と高松

［香川県］

小説家、劇作家、実業家、政治家。
菊池の才能はこのまちで目覚めた。

本好きの人間にとっての何よりの楽しみは、贔屓の作家の新刊を手にすること、そして新しい才能あふれる作家に出会うことだろう。明治21（1888）年に高松で生まれた菊池寛が、新人作家の登竜門として設立した芥川賞と直木賞は、現代日本文学の発展に大きな功績を残した。

菊池家は元々高松藩の儒学者の家系だったが没落。少年時代の菊池は教科書すら買えず、友だちから借りて写して使うほど貧しかったというが、記憶力は抜群、英語も大得意、手抜きしながらも学業はいつもトップだった。また、文芸雑誌を愛読し、文学への興味を湧かせ、高松中学校（現香川県立高松高等学校）時代には、地元図書館で借りた2万冊を2年間で読破したエピソードもある。後に進学した第一高等学校（現東京大学）から京都帝国大学文学部に移り、戯曲を発表するようになる。そのころ、芥川龍之介や夏目漱石らと交流する。

卒業後は新聞記者の傍ら、大正6（1917）年に『父帰る』を発表、大正9（1920）年には新聞連載で大好評を博した『真珠夫人』につなげている。

常々から、作家たちが小説で食べていけるようにと考えていた菊池は、人気作家となったことで、精力的な動きを見せる。大正12（1923）年、若い作家のための文芸雑誌を自費で発刊させる。それが『文藝春秋』だ。創刊号3000部はたちまち売れ、刊を重ねるごとに部数を伸ばしていった。昭和10（1935）年には、2月、8月の書籍の売上げ閑散期に合わせて、芥川賞と直木賞を設立している。これには文藝春秋社の社長としての才覚も見て取れる。その後は、政界に進出したり、国の要請で映画会社の大映の社長にも就いている。

生家があった「菊池寛通り」には、家族の愛憎を描き菊池を世に出した『父帰る』の像が建つ。逆境の少年時代を乗り越えて、時代を見るリアリスト、次代を創るヒューマニストになった菊池の才能は、このまちで目覚めた。

生家があった場所の前を走る「菊池寛通り」。『父帰る』の像がある。

市民の憩いの公園に碑や銅像が建つ。

市の中心地に位置する高松市立中央公園。その西口の傍らには『父帰る』の文学碑と菊池寛顕彰碑が並ぶ。道路を隔てた向かい辺りに、菊池の生家があった。公園の東に回れば菊池寛像が建っている。

高松市立中央公園 高松市番町1-11

●菊池寛写真は菊池寛記念館提供

菊池 寛（きくち かん）

明治21（1888）年～昭和23（1948）年

本名は菊池寛（ひろし）。小説家、劇作家以外にも多彩な顔を持つ。代表作は『父帰る』『恩讐の彼方に』『真珠夫人』。文藝春秋社を創設。

菊池寛記念館

郷土の偉大な文化人、菊池寛の生涯を紹介するメモリアルミュージアム。生前写真や直筆原稿、数多くの遺品を展示。文学遺産として芥川賞、直木賞、菊池寛賞の全貌を展示と映像で紹介する。

高松市昭和町1-2-20サンクリスタル高松3F
☎087-861-4502、9:00～17:00、月休、P有

「ヒューマニストとしての菊池寛に出会えます」

映像展示や再現された書斎などもあり、菊池寛の魅力と生涯をゆっくりと見学いただけます。

学芸員 榊田 瑶子さん

読みたい一冊

生い立ちから青春時代、作家活動、晩年まで。代表作の『父帰る』『真珠夫人』と併せて読めば、より人間的な魅力がわかる。菊池寛記念館。

ひと休みトーク Tabi no Bookmark

新鋭作家に扉を開いた芥川賞と直木賞。

菊池の多くの功績の中で文学ファン最大の関心事は「文藝春秋」が発表する芥川賞と直木賞だろう。昭和10（1935）年の第1回芥川賞は石川達三『蒼氓』、直木賞は川口松太郎『鶴八鶴次郎』『風流深川唄』、第162回になる令和元（2019）年下期の芥川賞は古川真人の『背高泡立草』、直木賞は川越宗一の『熱源』が受賞している。

同郷を見極めるために謎をかけた。

東京で成功を収めた菊池のもとへは、同郷を名乗り金の無心が数多くあった。そのため本物かどうかを確かめるため、珍しい北向き天神だった「華下天満宮」の向きを聞いたという。
目印はブロンズの牛。路地に入れば小さな社がある。

華下天満宮 高松市百間町3-8

日本一長いアーケード。

個性が異なる8つの商店街をアーケードで結び、東西南北に広がる高松中央商店街は総距離2.7㎞にもなり、日本一長いアーケードといわれる。菊池寛ゆかりの華下天満宮は片原町西部商店街の中にある。

一歩一景の名庭を歩こう。

栗林公園は、江戸時代初期の回遊式大名庭園で、緑深い紫雲山を背景にして多彩な池と築山が美しい国の特別名勝。歩くほどに異なる表情に出会える。

栗林公園
高松市栗林町1-20-16 ☎087-833-7411
日の出から日没まで、P有

日本三大水城で、鯛のエサやりを体験。

瀬戸内海から堀に水を引いた水城で、日本三大水城に数えられる高松城を中心に、玉藻公園として整備され、内濠遊覧も楽しめ、鯛のエサやりもできる。

玉藻公園
高松市玉藻町2-1☎087-851-1521
日の出から日没まで、P有

先人の知恵がつまった四国の暮らしを散策しながら体感。

源平ゆかりの屋島山麓の野外民家博物館。徳島祖谷渓の「かずら橋」を再現するほか「小豆島農村歌舞伎舞台」や「南予の茶堂」など、四国各地から30棟以上の建造物を移築して、四季折々の美しい自然の中で昔の暮らしぶりを紹介している。

四国民家博物館「四国村」
高松市屋島中町91☎087-843-3111、8:30～18:00
（11月～3月は17:30まで）、P有

やっぱり“うどん県”。お腹が減ったら古民家で楽しむ讃岐うどんがオススメ。

地元に伝わる昔ながらの手法の讃岐うどんの名店。ざいごとは田舎を意味する「在郷（ざいごう）」が訛ったもので、江戸時代の藁葺民家を使った店内で味わう釜あげうどんは絶品。大きなたらいで出てくる家族うどんが名物。みんなでつるっといこう。四国村の入口にある。

ざいごうどん 本家わら家
高松市屋島中町91
☎087-843-3115、
10:00～19:00
（※季節により異なる）、P有